

農業が変わった

——食料生産の現場が同時に生物多様性保全の現場に

大食漢のコウノトリも住める環境をつくることは、餌場となる豊かな湿地の生態系を取り戻すことです。ポイントは、田んぼ、水路、川、そしてそれらのネットワーク。

中でも農業は大きく変わりました。田んぼを中心とした湿地には、ナマズやフナ、トンボなどの「命」が帰ってきました。



コウノトリの餌場となる田んぼでは、たくさんの生きものを増やす取り組みが進められています。その一つが、平成15年にわずか0・7ヘクタールの面積で始まった「コウノトリ育む農法」。平成26年には約293ヘクタールに拡大し、約290人の生産者が、農薬や化学肥料に頼らない、手間暇掛けたお米を生産しています。この取組みは販売店をはじめとする事業者や、このお米を食べる消費者によって支えられています。

豊かさを増した田んぼと水路をつなぐ水田魚道を整備するとともに、その先にある川では、河川敷を浅く掘って湿地を造っています。

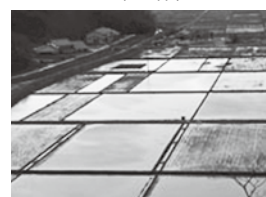
食料生産の現場が同時に生物多様性保全の現場に——田んぼには、ドジョウやヤゴ、カエルなどの生きものが帰ってきました。コウノトリも帰ってきました。そして、環境学習の場として、子どもたちも帰ってきました。

命のつまった田んぼを育む コウノトリ育む農法

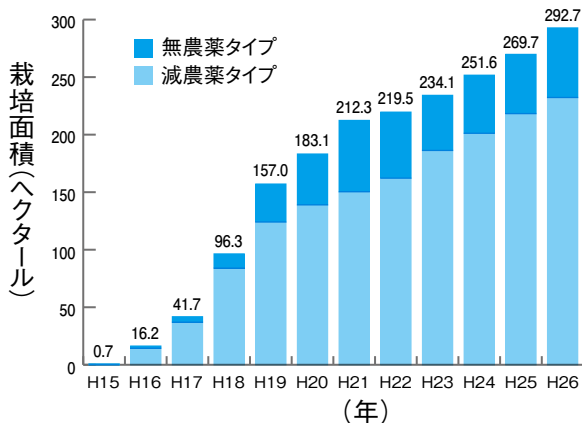


おいしいお米とさまざまな生きものを同時に育むのがコウノトリ育む農法です。水管理などでさまざまな工夫をし、安全安心なお米を生産しています。

❖冬期間に田んぼに水を張る冬期湛水や、田植えの1カ月前から水を張る早期湛水など、水管理を工夫しています。



《コウノトリ育む農法の栽培面積》



❖雑草を抑えるため一般的な農法より深い水深で管理(水深8cm程度を維持)。コウノトリを絶滅に追い込んだ農薬には頼りません。

❖一般的に、豊岡では6月ごろに田んぼの水を全部抜きます(中干し)。コウノトリの餌場を確保するため、オタマジャクシがカエルに変態するのを確認してから、中干しします(一般的な農法より1カ月程度遅い)。





邂逅 悦喜さん(77) 祥雲寺
なわてえつよし

農業

コウノトリに選ばれる 田んぼ作り

家族や消費者のために安全な米作りをしたいと思っていました。平成4年、区にコウノトリ野生復帰拠点施設を作る話があり「米作りに農薬は使えないな」という話が自然に出てきました。平成15年からは、県や市の指導でコウノトリ育む農法に取り組んでいます。それまでやってきた一般的な農法と違うので、不安もありましたが「失敗しても仕方がない、やってみよう」の気持ちで取り組みました。

朝起きて玄関から田んぼを見ると、コウノトリが餌をついばんでいます。無農薬の田んぼを好んで来ます。安全な田んぼが分かるんですね。

コウノトリの郷営農組合から始まった安全・安心な米作りが、各地に広がっていることを誇りに感じます。

生産と販売の現場

こだわりのお米を市場に提供

コウノトリ育む農法の開発で、生命を慈しみ、自然と共生する農業が実現しました。

生命が躍動する田んぼで育つ「コウノトリ育むお米」は、田んぼのエネルギーを吸い上げ、自然の力で作るお米です。統一した農法と生産者の努力で、こだわりと品質を確保。消費者からは「安心して食べられることがうれしい」と好評です。7月に発売したパックごはんの販売も好調です。

このお米は、先進的な特別栽培米として、全国的に知られています。さらに取組みを強化するために、平成27年、JAたじまでは最先端のカントリーエレベーターが完成。全国トップクラスのこだわりのお米を全国の市場に提供していきます。



塩見真仁さん
しおみまさひと

JAたじま米穀課



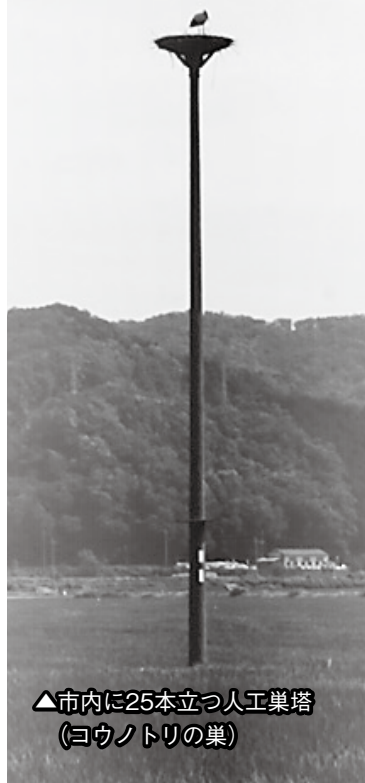
ラムサール条約登録湿地

～世界が認めた「自然再生」～

さまざまな生きものの命を育む国際的に重要な湿地として、平成24年7月にラムサール条約に登録された『円山川下流域・周辺水田』。自然再生の積み重ねによってさらに豊かさを増した湿地環境の下で、コウノトリが暮らしています。

よみがえった
新たに生まれた

水
辺
環
境



▲市内に25本立つ人工巣塔
(コウノトリの巣)



▲冬期湛水の田んぼにはコハクチョウも
飛来



▲ツデグロヅル(左)とコウノトリ(右)の
ツーショット



▲出石川に創出した
加陽湿地



▲野生コウノトリが来た
ハチゴロウの戸島湿地



▲区民が主となり整備した
田結湿地